

〔「墨の天地」展によせて〕

黄山の松—「擾龍松」を描く作品を中心に—

中国の江南（長江下流の南岸）に位置する安徽地方は、天下第一の奇山といわれる黄山を擁しています。林立する奇峰とその上に根を伸ばす松、刻々と姿を変え、雲霞の景は、古来より多くの人々を魅了し、現在ではユネスコ世界遺産にも登録されています。

黄山は、奥部への登山ルートが整備された康熙41年（1613）以降、更に多くの人々が訪れるようになり、安徽を出自とする画家たちを中心に、多彩な黄山図が生み出されました。雄大な山水景はもちろん、山中の名松も、黄山で人気を博した画題でした。黄山は岩上で奔放に枝を伸ばす奇松が多いことで知られ、かの鄧小平（1904～97）も愛した「迎客松」（図1）等が、今も登山者の目を楽ませています。このように松の姿が注目される背景には、古くから中国で松のたたずまいや形を、節操ある人物あるいは龍の姿等に例えてきた伝統があります。特に絶壁や谷底等に生える松は、才に恵まれながらも不遇な人物の姿に同一視されました。明末の謹嚴実直の官僚・黄道周（1585～1646）は、黄山を訪れた際に見た奇松を墨一色で表していますが（図2「松石図」部分。大阪市立美術館蔵）、黄山の松達の姿に、あるべき理想像を重ねたのでしょう。



図1



図2

清初（17世紀中期）は、安徽出身の文人画家達を中心に「安徽派（新安派）」と呼ばれる地方画壇が成立しましたが、故郷の名勝である黄山は、彼等の創作の淵源であり、シンボルともいえる画題でした。その中で人気を博した画題の一つに、名松「擾龍松」があります。黄山始信峰下の小峰の頂上に生え、枝を長く伸ばす様が龍の爪のようだったというこの松は、「黄山の帝松」として当時の人々に絶賛されました。残念ながら現在は枯死してしまい、その姿を見ることができませんが、清代に描かれた様々な作品に、往時の姿を偲ぶことができます。擾龍松を絵画化した現存最初期の作例として、安徽派の確立者とされる漸江（1610～64）の「擾龍松図」（図3。「黄山六十景図冊」〔北京故宫博物院蔵〕より）があります。天に向かつて聳える独峰に根を生やし、画面左側に長い枝を垂下させ、孤高の人物を思わせる佇まいです。更に康熙18年（1679）刊の地理誌『黄山志定本』には、漸江原画と伝わる「擾龍松」挿絵版画が掲載されています。漸江はこの他にも「黄山蟠竜松図」（図4。メトロポリタン美術館蔵）等、黄山松に着目した作品を残しており、肉筆画や版画挿絵を通して、擾龍松を始めとする黄山松の名声を広めただけでなく、描く際の「型」を示し、黄山松の画題を普及させた重要な画家とみなせるでしょう。なお安徽派の山水画には、しばしばブロックの



図3



図4



図5

ような岩の頂で奔放に枝を伸ばす松の姿が描かれますが、このモチーフは黄山松の姿に学んだものと思われる。

また同じく黄山を愛した画家として知られる石濤（1642～1707）も、擾龍松（図5。「黄山八勝図冊」第七図〔泉屋博古館蔵〕）を描いています。こちらは漸江画とは見る方角が異なるらしく、画面右手前に枝を垂下させる様を表します。なお擾龍松の背後には、実際には離れた場所にあるランドマーク「煉丹台」を描いており、現実の地理関係に固執しない、石濤の自由な作画態度が窺われます。また石濤は、黄山諸峰をパノラミックに表した「黄山図巻」（泉屋博古館蔵）でも、小さく擾龍松を表しており、愛着のほどが感じられます。

清中期（18世紀）の安徽出身の画家である方士庶（1692～1751）が、繊細な墨筆で12図を描いた「山水図冊」（大和文華館蔵）の中にも、黄山の景に由来するとみられる図がいくつか見出されます。このうち第11図（図6）には、雲霞の漂う岩場に、頭を伏せるかのように幹を曲げる不思議な姿の松が描かれています。松の名は明示されていませんが、おそらく黄山の奇松の一つで、岩場の形状から擾龍松の可能性もあります。方士庶が慕わしい黄山の景を自らの造形語彙として内在化し、自身の解釈のもと、自由に作品に取り入れていったことが窺われます。また、銭塘（今の浙江省杭州



図6



図7

市）の黄易（1744～1803）が描いた「擾龍松図」（図7。京都国立博物館蔵）は、画中に『黄山志定本』から文面を一部抜粋した擾龍松への賛辞が添えられ、郷里の画家とは異なる、やや畏まった趣です。図様は、型そのものは漸江の「擾龍松」を継ぐものですが、単なる踏襲に終わらず、繊細な筆と墨の濃淡で、優美な松の姿が表されます。こうした作例は、清中期の画家達が黄山の実景、そして漸江や石濤等の先人による図様伝統をある程度意識しながら、それを自身の画風に取り込み、新たな黄山表象を生み出していったことを窺わせます。

「黄山は吾が師、そして吾が友である」とは、清の石濤の言葉ですが、20世紀以降も、黄山には国内外から人々が訪れ、その風景に感銘を受けて多彩な芸術活動がなされています。本展観を通して、黄山松を始めとする黄山の景に画家達が注いできた親愛のまなざしを感じていただければ幸いです。（都甲さやか）

※図3は『世界美術大全集 東洋編九 清』小学館、1998年、図4は古原宏伸『中国画論の研究』中央公論美術出版社、2003年より複写いたしました。